愛知教育大学研究報告，35（教育科学編），pp. 35～46，February，1986

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの哲学・教育論争について

—フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題—

（その8）

永　冶　日　出　雄

Hideo　NAGAYA

（教育学教室）

Ⅰ　エルヴェシウスに対するルソーの批判

（『研究報告第25輯』1976年3月）

Ⅱ　ルソーに対するエルヴェシウスの批判

（『研究報告第26輯』1977年3月）

Ⅲ—Ⅶ　エルヴェシウスに対するディドロの批判（上，中，下の一，下の二，下の三）

（『研究報告第27輯』1978年3月，『研究報告第31輯』1982年2月，『研究報告第32輯』1983年1月，『研究報告第33輯』1984年1月，『研究報告第34輯』1985年2月）

Ⅷ　エルヴェシウスに対するディドロの批判（下の四）

—自然的要因の重視と生理学・医学への熱意—

7．『人間論』第二篇へのディドロの批判　その1—自然的要因の重視と生理学・医学への熱意

エルヴェシウス著『人間論』において第二篇は全十篇のなかで最大の部分を占め，ディドロによる批判も四割がこの篇に集中している。こうした事情から『人間論』の中心が第二篇にあるようにしばしば誤解されてきた。『人間論』が処女作『精神論』の焼き直しであるとの批評もここに発する。[1] 筆者の意見はそれとは異なり，政治理論と教育理論が展開される第九篇と第十篇に『人間論』の真価を認める。この点についてはのちに詳しく説明しよう。

『人間論』第二篇は24の章と後註から成り，つぎのような標題を掲げている。「正常な身体組織を有する人間はすべて平等な精神的素質をもつ。」すでにエルヴェシウスは『精

神論』第三篇で政治理論や教育理論の基礎として人間学の原理を提示した。『人間論』第二篇はこうした原理の確認，補足，敷衍に当てられる。したがって，ここでの論述が迫力と斬新さに乏しいことは否定できない。筆者自身の印象を述べれば，豊富な事例や史実を挙げて原理を開陳する『精神論』第三篇のほうが，はるかに魅力的に感じられる。しかし，エルヴェシウス晩年の立場やディドロとの相違を知るうえで，『人間論』第二篇が重要な資料であることは言うまでもない。

各人の能力と性格は先天的に定められるか，それとも後天的に形成されるか。これを原理的に究明することが，『人間論』第二篇の課題である。課題を提起する第二篇第一章とこの章に対するディドロの論駁をまず検討しよう。やや長い引用になるが，エルヴェシウスの問題設定とディドロの対応の仕方がよく判ると思う。

＜資料17＞

A．エルヴェシウス著『人間論』第二篇第一章
私たちのあらゆる観念は感官に由来する。したがって，身体組織の精粗こそ精神の優劣を生み出す，と人々は信ずる

ロックが明らかにしたとおり，私たちに観念と精神を授けるのは感覚器官である。また，様々な人間を観察すると，器官にも精神にも相当の差異が認められる。以上の事実から一般に人々は，精神の不平等は感官の精粗から生ずると結論する。

この尤もらしい意見は動物からの類推に基づく。なぜ，これが広く受け入れられるか。人々の怠惰を是認し，研鑽の労を無益と感じさせるからである。

だが，精神の優劣は五感の精粗に依存しない，と経験は反証する。経験の指し示す現象をほかの原因から説明することが求められる。

この問題に関して学者もふたつの意見に分れている。若干の学者たちは言う。「精神は一定の気質や身体組織の所産である。」しかし，どんな器官や気質や食物が優れた精神を生み出すであろうか。いかなる考察もまだこれを明示できない。こうした主張は茫漠としており，論拠に欠ける。次の言草とどう異なるか。「精神は知られざる原因，不可解な性質の所産である。これらを気質あるいは身体組織と名づけよう。」

これに反しクインティリアヌスやロックや筆者は以下のように主張する。

「精神の不平等を造り出す原因は明確である。それは教育の相違にほかならぬ。」

前者の意見を立証するためにはなにが必要か。卓越した精神が一定の器官や体質から生れる事例を数多く提示することが必要であろう。沢山の事例を集めるがよい。どちらの意見が精神の不平等の原因を説明できるか。後者の意見と思われる。

不平等の明確な原因を把握することは可能である。それなのになぜ知られざる原因，不可解な性質を述べ立てるのか。そうした原因や性質は存在することすら疑わしく，なんの説明にもならぬ。

＜正常な身体組織を有する人間はすべて平等な精神的素質を持つ。＞（原註）この定言を論証するために，精神を産出する原理にまで遡ろう。そもそも精神とはなんであるか。

（原註）疑いもなくロックはこのような真理の手掛かりを摑んでいた。彼は精神

的能力の不平等について論じ，各人の間には想像するほどの差異は認められないと言う。「百人のうち九十人までが」とロックは『教育論』で述べる。「教育によって現在の姿になった。授けられる教育の如何で，彼らは善人にも悪人にも，社会にとって有益にも無益にもなる。各人の間に認められる大きな差異は教育のもたらしたものにすぎない。」[2)]

B．ディドロ著『<人間論>への反駁』第二篇第一章

〔『人間論』82頁〕「ロックが明らかにしたとおり，私たちに観念と精神を授けるのは感覚器官である。」「一般に人々は精神の不平等は感官の精粗から生ずると結論する。」これを明確に述べたのはアリストテレスを嚆矢とする。あらかじめ感覚のうちにないものは，悟性のうちに存在しない，と彼は説いた。ロックよりもかなりまえにホッブズが居る。簡潔で崇高な作品『人間の本性について』のなかで彼はアリストテレスの原理から可能なかぎりあらゆる結論を引き出した。

〔『人間論』83頁〕「だが，精神の優劣は五感の精粗に依存しない，と経験は反証する。経験の指し示す現象をほかの原因から説明することが求められる。」

俊秀が激しい熱病に罹り，腑抜けに変る場合，逆に愚者が憑かれたようになり，その言動が閃きをみせる場合がある。

また，高所からの墜落や頭部の打撲により理性と共通感覚を喪失する俊秀も居る。こうした人達でもほかの器官には異常が認められない。

精神がどれほど高度な働きを示すかは，主として脳髄や小脳の構造に依存する，と私は結論したい。

器官の発達や年齢の変化との関連で精神の発展を考えれば，こうした結論の正しさが確かめられよう。

〔『人間論』84頁〕「各人の間には想像するほどの差異は認められない，とロックは言う。」認められないのは想像するほどの差異であって，いかなる差異も見出されぬわけではない。鈍重な人物を活発な性格に変えることは，豚に軽快な猿の性格，敏捷な栗鼠の性格を授けることより難しい。

〔同書84頁〕「ロックは言う。百人のうち九十人までが教育によって現在の姿になった，授けられる教育の如何で，彼らは善人にも悪人にも，社会にとって有益にも無益にもなる，と。」

善人にも悪人にも，とロックは述べる。だが，知恵者にも痴れ者にも，とは述べていない。

高潔であるか邪悪であるかは，天才であるか愚者であるかと同じく，身体組織により左右される。しかし混同してはならない。また，本来の性向と実際の行為も区別してほしい。理由を説明しよう。

本来邪悪な男が邪悪な行為に伴う不利益を経験と自省によって知る。邪悪な人間であることに変りはないが，彼は善を行うであろう。

頭の悪い男が知慮ある行為に伴う利益を経験と自省によって知る。彼は賢明に振舞うつもりになるが，まったく駄目である。考えることも，行うことも，話すことも依然として間が抜けている。（中略）

生れながらに怠惰な人間も居る，とクインティリアヌスは語った。身体組織から発する悪徳を認めたではないか。教育への平等な素質を持つ，とこの場合でも言えるだろうか。

学問に対して鈍重で不向きな精神は自然における化物にすぎない，とクインティリアヌスは述べる。なんと多くの化物が存在することか。天才も愚者と同様に化物とみなしたほうがよい。そのように主張すれば，クインティリアヌスはもっと顧みられたであろう。

もうひとつの感想をどうしても付加したい。それは緻密で厳正な批評の原理から得られたもので，読者に有益な助言になると信ずる。どれほど謙虚で思慮深い人物の講演や著作でも職業上の誇張を多少とも含んでいる。ロックとクインティリアヌスは教育を主題にして本を書いた。立派な教育を授けることはいかなる子供にも可能である，と彼らは熱心に説く。実際に父親である者まで説得できたら，ロックの読者とクインティリアヌスの弟子がさらに殖えたであろう。実際にはどうか。愚者はクインティリアヌスの学校を出ても，依然として愚かである。ロックの崇高な原理に従い，細心の配慮を施したが，私の息子はものにならなかった。[3)]

エルヴェシウスの問題設定が根源において中世的な人間観への挑戦であることは，第一篇を検討するさいにも述べた。とりわけトマス・アクィナスの『神学大全』とエルヴェシウスの著作の間には一定の照応関係が認められる。[4)] しかし，中世的な人間観との対決はすでに百年の歴史を閲している。それは理性の平等を宣したデカルトによって火蓋が切られ，生得観念を否定するロックのもとで大幅に前進した。こうした成果を継承して啓蒙思想の先陣ラ・メトリーとモンテスキューが登場する。人間形成の要因として前者はとくに生理や体質や血統を力説し，後者は主として気候と風土を重視した。

このような思想的状況のなかでエルヴェシウスは直接には生理学的な能力論と風土論的な民族観を俎上に載せる。自然的な要因を強調するあまり，ラ・メトリーやモンテスキューの理論も中世的な人間観と同じように宿命論へ導くのではないか。エルヴェシウスの『人間論』とラ・メトリーの『人間機械論』を対置すれば，こうした危惧は充分に理解できる。

エルヴェシウスの論述に対してディドロの試みる批判は，序説や第一篇の場合と大差なく，やはり断片的である。『人間論』の問題提起が正面からは受け止められず，枝葉末節にわたる論評すら加えられる。ここでもディドロの力点は素質や個性の先天性，肉体的・生理的要因の重要性を説くことにある。素質の相違を強調する評言の背後にディドロ自身の痛切な課題が潜むことをさきに筆者は指摘した。天才を求める時代の要請やみずからの天分についての自覚がそれである。執拗に肉体的要因を力説するディドロの脳裡には，どのような展望と抱負が宿るのであろうか。『人間論への反駁』を正当に評価するためには，エルヴェシウスへの評言を追うだけでは足りない。批判する人間自身の課題や展望にまで眼を向けないかぎり，批判書を読む意義は微々たるものに終る。

なお，両者の論述のなかにロックとクインティリアヌスが現れることは，教育思想の歴史のうえで興味深い。言及されているのはロック著『教育論』の有名な冒頭とクインティリアヌス著『弁論家の教育』の第一巻第一章である。[5)] 青年エルヴェシウスに思想的な覚醒

をもたらしたのは，ロックの『人間悟性論』にほかならぬ。[6] これをどう摂取したかは<資料17>のAからも読み取れる。ロックを継承しながら，ディドロの進む方向はかなり違う。『百科全書』第九篇には彼の執筆した項目「ロック」が見出される。ここではロックの紹介や解釈がされているだけではない。ディドロの人間学的な射程を知る鍵として，項目「ロック」はとくに重要な一文と考えられる。

<資料18>

A．ラ・メトリー著『人間機械論』

体質が異なれば，精神も性格も品性も異なる。ガレヌスはすでにその真理を知っていた。デカルトはこれをさらに推し進める。医学だけが身体の改善とともに精神や性格の改善をなしうる，とまで彼は語った。自然が人間に黒胆汁，胆汁，粘液，血液などを授けたことは確かである。こうした液体の多寡および配合が十人十色の性格を産み出した。

病魔に冒されると，魂は眠り込み，活動を停止する。さもなければ，病熱に煽られて支離滅裂となる。病気のまえに愚鈍であった男が，病気のあとで鋭鋒を現すこともある。反対に稀有の天才が痴呆に変り，過去を思い出せぬこともある。多大の費用と労苦をかけて高度の知識を習得しても，いったいなんの役に立とう。（中略）

顔立ちや骨相の特徴が明白に認められる場合，どんな精神が宿るかを推測することは，偉大な骨相学者でなくともできる。固有の病状がはっきりと現れている場合，凡庸な医者でも診断が下せるのと同様である。ロック，スチール，ブールハーフェなどの肖像を眺めるがよい。彫りの深い顔立ち，鷲のように鋭い眼がいかにもふさわしいことに気づくであろう。さらに数多くの肖像を観察してほしい。そうすれば，天才と才人とを，詐欺師と正直者とを判別できる。（中略）

ある民族は鈍重で暗愚な精神を持つ。ほかの民族は活発で軽快で透徹した精神を有する。こうした相違はどこに由来するか。日々摂取する食物の相違，父祖から伝わる精液の相違に由来する。大気のなかを浮動する混沌たる諸元素が成因となることもあろう。肉体と同じく精神も伝染病や壊血病に見舞われる。

風土の影響は甚大である。転地した者はこれを痛感する。植物の移植を考えるがよい。風土が変れば，植物も退化するか，進化する。[7]

B．ディドロ「ロック」（ディドロ＝ダランベール編『百科全書』第九巻）

幸福になるためには，優れた精神を持つだけでは足りない。身体を健全にすることも必要である。それゆえ，ロックは悟性に関する書物を公にしたのち，教育について論文を書いた。

子どもが誕生した時点でロックは始める。もうすこし早い時点から扱うほうがよかった。なにを問題にするのか。立派な人間を産出できる処方を考えてみよう。庭園で花木を楽しみたい人は，植えつけの時期を選び，適した土壌を用意し，そのほか様様な配慮を施す。こうした配慮の大半は花木よりはるかに大切な生きものにも応用できる。両親が健康であること，ふたりが満ち足りた穏やかな気持でいることが肝要

である。両親が自己の人生をもっとも幸福に感じている時点で，子どもの人生が始まるようにしたい。懐妊した女性をたえず苦渋に曝せば，胎内で発生成長する柔かな生きものが傷つくことは明らかである。果樹園に苗木を植え，毎日一度ずつ激しく揺すぶってみよう。どんな結果になるか，だれでも判る。配偶者や隣人は懐妊した女性を聖なる存在と崇めるがよい。[8)]

＜資料18＞のＡに示されたとおり，ラ・メトリーが強調する自然的要因には健康や食物も含まれる。こうした自然的要因が不変である，と彼は主張するのではない。『人間機械論』の刊行には生理学と医学の発展をとおして人々の自然的条件を改善する願いが籠められていた。医師ラ・メトリーの生理学的な人間観はディドロに深い影響を与える。[9)] しかし，三代にわたる名医の家に生れたエルヴェシウスが，そうした願いを読み取れなかったであろうか。『精神論』第二篇には伝染病にたいする特効薬の発明を人類全体への貢献と評価する叙述がある。[10)] とはいえ，エルヴェシウスは自然的要因を重視する立場を宿命論として偏狭なまでに退ける。このような姿勢を貫いたのは，根源においてトマス・アクィナスの人間観と対決したためと思われる。トマス・アクィナスが神の創造した万物を永久不変と説いたことは言うまでもない。

『百科全書』の項目「ロック」においてディドロはまず『人間悟性論』を紹介し，ついで『教育論』を手短かに要約する。『教育論』のなかから彼が取り上げたのは主として保健と体育の問題であった。別の仕方でロックを継承するエルヴェシウスは，『人間論』でも身体の訓練について簡単に触れるにすぎない。＜資料18＞のＢには自然的要因を力説するディドロの真意がよく表わされている。健康や食物や気候に注意を促すのは，子どもに最善の肉体的条件や自然的環境を用意するためである。ここでは人間による自然の制御が個人の誕生以前にまで拡大され，母性保護の訴えと優性学の萌芽すらみられる。こうしたディドロの射程がやがてコンドルセに引き継がれ，人類発展の一助とみなされることを付記しておきたい。[11)]『人間論』の論述とディドロの反駁をもうすこし追ってみよう。

＜資料19＞

Ａ．エルヴェシウス著『人間論』第二篇第四章
精神はいかに作用するか

精神のすべての営みはなにに還元できるか。事物相互の間の関係に，あるいは事物と私たちの間に存する類似と相違，適合と不適を考察することに還元できる。そして，こうした考察を持続させる注意の大小によって，正しい精神となるか否かも定まる。

いくつかの事物について相互関係を知るにはどうするか。二個以上の事物を眼前に置く。あるいは記憶から呼び戻し，逐一比較する。さて，比較とはなんであろう。＜ふたつの事物が私に相異なった印象を与える。そうした印象を交互に考察することが比較である。考察の対象にされるのは眼前に置かれた事物でも，記憶のなか貯えられた事物でもよい。＞このような考察を経て，私は判断する。すなわち，私は＜受け取った印象を正確に報告する＞。（中略）

事物と私たちの関係を考察する場合にも，どんな印象を受け取ったかに注意を向け

る。快い印象も不快な印象もある。いずれにしても，私は<判断する>。すなわち，<感じたことをそのまま報告する>。頭を殴られた。激しい痛みである。耐えきれぬ感覚を人に訴える。これこそ判断にほかならぬ。（中略）

こうした種類の感覚はかならず判断を伴う。以上の程度に例証をとどめ，一語だけ繰り返そう。どんな場合であろうと，<判断することは感ずることにほかならぬ。>

かくして精神のあらゆる作用は純粋な感覚に還元される。だが，感ずる能力とは別に判断する能力が存在する，となぜ人々は考えるのか。この考えのほうが一般には受け入れられ易い。人々は言う。「自分は感じ，比較する。だから，感ずる能力のほかに比較し判断する能力を自分は持っている。」こうした論理に大抵の人は騙される。これが誤りであることを悟らせるため，<比較する>という概念を明確にしたい。[12)]

B．同書　第二篇第六章

利益が得られなければ，事物を比較することもない

柏の老樹が繁り，種々の灌木や薫り高い花が配された岸辺を，上流人士と植物学者が一緒に散歩する。上流人士は清澄な流水，風格ある柏，多様な灌木，草花の芳香に感動する。だが，植物学者と同じ眼でこれら灌木と草花について類似や相違を識別はしない。識別して上流人士になんの利益があろう。したがって，注意を向けることもない。無意識のうちに感覚を受け取り，判断を下すだけである。名声を渇望する植物学者，灌木や草花を綿密に研究する植物学者は違う。彼だけが注意を傾けて様々な感覚を確認し，色々な判断を引き出す。（中略）

本章の結論を記そう。事物を比較して判断を下すには，比較して利益の得られることが前提となる。そうした利益はかならず幸福の追求に根源を持っている。そして，いかなる快楽も苦痛も肉体的感性から発現する。だから，利益と関心は肉体的感性の所産にほかならぬ。[13)]

C．ディドロ著『<人間論>への反駁』第二篇第四章および第六章

〔『人間論』108 頁およびそれに先立つ数頁〕「感ずることは判断することにほかならぬ。」このように表現された定言が厳然たる真理であるとは思えない。愚者は感ずるが，判断を下さない。記憶を喪失した者も感ずるが，判断を下さない。判断の前提としてふたつの観念を比較することが必要である。比較はどのように行なわれるか。それを知ることは難しい。比較するときにはふたつの観念を表象する。ふたつの観念は同時に表象することも，表象しないこともあろう。こうした精神の作用をエルヴェシウスが明快に説明できるか。できれば，困難な問題を解いたことになる。

機嫌の悪いときに，第六章を読んだのであろう。以下のような感想が書き留めてある。当を得ているかどうか判らないが，この感想は今後も変わるまい。『人間論』の形而上学からなにが帰結するか。「判断もしくは事物の比較が行われるのは，それが利益と結びつく場合だけである。すべての利益は幸福の追求に始源を持つ。そして，幸福の追求を促すのは肉体的感性にほかならぬ。」これほど牽強付会な理屈はない。こうした理屈は人間よりも動物一般に当てはまる。肉体的感性を持っていること，つまり植物でも石でも金属でもないことから幸福の追求へ，幸福の追求から利益へ，利

益から注意へ，注意から観念の比較へと一気に飛躍する。このような一般化を受け入れることは到底できない。（中略）

感覚と生命を有する動物の実体を研究するよう，すべての物理学者と化学者に私は勧めたい。

卵の生育やこれに類する自然の営みを眺めよう。無生物のように見える有機的な物質が，純然たる物理的な動因によって生命のない状態から感性と生命を持つ状態に移行することは明白である。しかし，こうした移行を可能にする必然的な連鎖が私には判らない。

物質，有機体，運動，光熱，生物，感性，生命。まだこれらの概念はきわめて粗雑に思われる。[14)]

＜資料19＞のＢは『≪人間論≫への反駁』を論ずる研究者がかならず取り上げる一文である。これについてまず書誌学的な問題から指摘しよう。＜資料19＞のＢとして抜粋した一節は，アセザ＝トゥルヌー編全集でもルヴァンテール編全集でも『人間論』第二篇第六章への論駁と考えられている。しかし，第一行でディドロ自身が示唆するとおり，これは第四章と第六章の双方に跨る批判である。「感ずることは判断することにほかならぬ。」このような表現は第六章には見当らない。第四章でエルヴェシウスは認識論の核心を提示しており，ディドロの攻撃はまずここに向けられる。ところで，＜資料19＞のＡから明らかなように，「判断することは感ずることにほかならぬ」という定言しか第四章には含まれていない。この定言は『精神論』第一篇第一章で提起されて，『人間論』でも再三強調される。しかし，ディドロは主語と述語を逆転させて，エルヴェシウスの言葉を引用する。こうした転倒によって定言の意味自体が変ってしまう。[15)]＜資料19＞のＢ，とくにその前半で展開される論義を辿ってみよう。『人間論』本来の定言，「判断することは感ずることにほかならぬ」という定言に対して，ディドロの批判は的確ではないと感じられる。

こうした定言を提示するエルヴェシウスの真意はなんであったか。トマス・アクィナスによれば，記憶力や判断力は感覚能力とは始源を異にし，生れながらに個人的な優劣が定められている。だから，判断力に秀でた王侯や僧侶が社会において指導的な役割を担う。このような中世的な人間観と対決して，エルヴェシウスは感覚こそ記憶や判断の源泉にほかならぬと主張する。感覚能力は万人に平等であり，記憶や判断における個人差は後天的に形成されたものにすぎない。精神を発展させる後天的な成因として注意の集中や利益の随伴が肝要なのである。ただし，こうしたエルヴェシウスの理論が『人間論』第二篇ではあまりにも抽象的・散発的に論述されている。判断を感覚に還元する意義を理解するには，『精神論』第三篇の詳細な論述を参照することが望ましい。そこでなされた記憶，注意，利益，情念等々に関する考察は教育方法論や学習心理学の観点からも興味深い。

とはいえ，こうした感覚一元論が激列な論議を呼ぶことは当然である。本稿＜その１＞で究明したルソーによるエルヴェシウス批判を思い出して頂きたい。ルソー研究の権威マッソンは『エミール』第四篇における「サヴォア人司祭の信仰告白」が『精神論』への間接的な批判を含むことを論証した。エルヴェシウスの認識論はルソーが激しく論駁した問題のひとつである。ルソーは比較や判断を感覚とは異質な作用とみなし，悟性の主体性と能動性をとくに強調する。彼によれば，対象を配列し，相互に関連づけるのは悟性の営

みにほかならぬ。このような理論が感覚一元論に対する典型的な批判であり，やがてドイツ観念論として体系化されることは言うまでもない。

ディドロの試みるエルヴェシウス批判は「サヴォア人司祭の信仰告白」とは著しく対照的である。<資料19>のBのなかに悟性の主体性と能動性を問題にする文言はほとんどない。感覚から判断に至る精神の作用を対象自体の本質や相互関係から理解すること，複雑な悟性の動きを生理学的に解明すること。こうした課題にディドロの関心は傾注される。遺作『生理学要綱』の第三部第二章は「悟性」という題されている。ここでも自然と精神の照応，悟性の働きと身体組織との関連が論述の大半を占める。[16] エルヴェシウスともルソーともディドロが関心や観点を異にしたことは明瞭である。ディドロが自己の課題をどれほど発展させたかをさらに奥深く究明しよう。

<資料20>

A．ディドロ著『生理学要綱』第二部第五章

脳　髄

脳髄ほど多様で複雑なものはない。容貌に劣らず，この器官も千差万別である。

微細な粒子が種々様々に配置されて，各人の脳髄を構成している。生理学者はこうした構造をいまだ充分に認識できない。だから，脳髄の役割がよく判らない。

脳髄の解剖によってアキーの外科教授ヴァンサン・マラカルヌは，脳葉自体やそれらの結合，数量，順序に種々の相違があることを発見した。彼によれば，脳葉を形作る葉片，葉片から伸びる髄質の小枝，脳葉や葉片における小枝の分布にも様々な差異が見出される。甲の脳髄ではある脳葉に若干の小枝が認めれるのに，乙の脳髄にはそれがまったく存在しない。さもなければ，ふたつの脳葉に共有されるか，ほかの脳葉に塞がれている場合もある。また，脳髄に刻まれる皺も遺体によって長さや太さを異にする。(中略)

脳髄は分泌する器官にすぎない。そこに織り込まれた白い繊維，共通感覚を司どる繊維，神経繊維，大小の器官繊維。こうした繊維の状態が分泌物の形質によって多種多様となる。分泌物は稀薄なものも濃厚なものも，純粋なものも不純なものも，少量のものも潤沢なものもあろう。ここから精神や性格の法外な多様性が生れる。頭蓋の一部を欠いた人間は，圧迫されることがすくないので，つねに精神の閃きを見せる。すこし圧迫すれば，眼差が暗くなる。さらに圧迫して腕を下げれば，眠くなり，鼾をかく。極端に圧迫すれば，卒中のようになろう。圧迫するのを止め，腕を上げよう。たちまち目が醒め，五感が自由に働く。

狂気，卒中，錯乱，酩酊などの場合にはかならず髄膜が冒されている。[17]

B．同書　第三部第九章

病　気

習俗が純朴な国では身体も健全で，病気も稀である。そこでは高尚で複雑な道徳も深遠で精密な医学も知られていない。これらを究めることに関心を持たぬからである。偉大な医師やモラリストはどこで必要か。大国の首都，人口が過密で生活が放埒な社

会において必要である。そうした土地でいかにして医学を発展させるか。遺体の解剖を奨励し，頻繁に行うがよい。

遺体の解剖は医学の進歩にきわめて役立つ。「解剖に付さないかぎり，」とラ・メトリーは語る。「腹膜の皺襞にできた水腫は普通の水腫と見分けがつかない。だから，いつも診断を誤る。」なお，遺体の解剖により病気の原因を究明する者は，皮相な観察で満足してはならぬ。種々の内臓を仔細に吟味し，個々の器官と全身の機能について異常の有無を点検するがよい。なぜなら，生きている肉体と死んでいる肉体の相違は外部におけるよりも内部において一層大である。人間の生存と医療の進歩ほど重要な事柄はない。それゆえ，つぎのように法律を定めてほしい。聖職者は解剖学者からのみ遺体を受け取ること，また解剖の以前には火葬をしないこと。こうした方法で知識の蓄積がどれほど進むことか。どうも疑わしい事象，いまだ知られざる事象は無数にある。これらの事象を究明するには多くの遺体を解剖するほかない。個人は自己の生命を維持するのにみな熱心である。だが，社会はこの問題を放置したままでいる。[18)]

生物学と医学はディドロが青年時代から強い関心を抱いていた分野である。三十代のはじめにロバート・ジェイムズの『医学総合辞典』を共訳した経験は，『百科全書』を刊行するための貴重な素地となった。この訳業をとおしてディドロは斬新な企画と着想，最新の学問的成果，医学者や生理学者との交流をかち得る。[19)]『ダランベールの夢』と『ロシア大学案』のなかで生物学や医学が重視されていることは言うまでもない。しかし，こうした試みが壮大な全貌を表わすのはやはり遺作『生理学要綱』においてであろう。歿後に発見された膨大な断章を校閲し，精細な註解を施したジャン・マイエルはこれを野望に充ちた壮図と評価する。ディドロが意図したのは人間を生物の世界に位置づけること，生命と思考を持つ存在として人間の本性を明確にすることであった。[20)]<資料20>のAで示したように，『生理学要綱』では脳髄の構造や機能の解明に力点がおかれる。どのような肉体器官が精神の優劣を産み出すか，とエルヴェシウスは『人間論』で反問した。心身を結合し，精神を統括する中心が脳髄であることをディドロは確信する。大脳と小脳の状態，脳髄に対する神経や感官の関係を綿密に観察しよう。そこに現れる生理学的な相違から能力や性格の多様性が生ずる，と彼は結論する。

こうした生理学的な観点はディドロにおいて医学への期待と堅く結びついていた。虚弱な体質を改善し，種々の疾患を治療するため，肉体や感官の構造を認識することが必要なのである。それはすでにデカルトが指し示し，ラ・メトリーやビュッフォンが切り開いた道にほかならぬ。ディドロは白内障の手術と人痘接種の実験に深い関心を寄せた。また，『生理学要綱』を準備するにあたっては，最新の学術書，ハラー著『生理学初歩』やボルドゥー著『慢性病の研究』などから多くを摂取する。[21)]

それゆえ，意見の表面的な対立にもかかわらず，エルヴェシウスとディドロの間には共通の基盤が存在する。前者が偏狭なまでに自然的要因を排除するのは，それが人間の手で改変できないからである。後者が執拗に自然的要因を強調するのは，それを人間の手で改造するためである。社会的要因を重視するエルヴェシウスも自然的要因を力説するディドロも所与の条件を改善する熱意では一致する。こうした点においてディドロの理論はトマス・アクィナスの教義と決定的に異なると言えよう。人間の変革と環境の改変を訴える啓

蒙思想の特徴が生理学的な人間観にも明瞭に認められる。

未完の著作『生理学要綱』のなかには独創的で先駆的な発想が数多く存在すると言う。偉大な生物学者，たとえばクロード・ベルナールは学問の発展を促す刺激と示唆をそこに見出した。[22]『生理学要綱』において最後の章が「病気」と題され，遺体の解剖に関する叙述で終るのは，きわめて象徴的に感じられる。医学の進歩と万人の幸福のため解剖を奨励することを，早くも『百科全書』第二巻の項目「遺体」でディドロは提案した。[23]こうした提案の意義は従来の医療の欠陥を突き，民衆の生命と健康を社会全体の問題としたところにある。[24]ここに掲げた<資料20>のBは医学への熱意を示す思想的な遺言とも考えられる。1784年7月31日にディドロが逝去すると，故人の意志に従って遺体の解剖がなされ，その頭脳は二十歳の若さを保つことが観察された。[25]

（昭和60年9月17日受理）

註

エルヴェシウスとディドロの著作に関して註では下記の略号を使用する。なお，すでに訳書がある場合も，本稿における引用はすべて筆者自身が訳出した。訳書の該当箇所を併記したのは，読者の便宜を考えたためである。

DDE: Denis DIDEROT et Jean D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers,* par une société des gens de lettres, Paris, Briasson, David, Le Breton et Durand, 1751–1765, 17 volumes.

DEM: Denis DIDEROT, *Eléments de physiologie,* éd. par J. Mayer, Paris, Didier, 1964.

DOA: Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes,* éd. J. Assézat et M. Tourneux, Paris, Garnier Frères, 1875–1877, 20 volumes.

DOD: Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes,* éd. H. Dieckmann, J. Fabre, J. Proust et J. Varloot, Paris, Hermann, 1975–, 16 volumes parus (sur 33).

DOL: Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes,* éd. R. Lewinter, Paris, Le Club français du livre, 1969–1973, 15 volumes.

DRL: Denis DIDEROT, Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé, l'Homme. dans DOL, tome XI.

HE1: Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit,* Paris, Durand, 1758.

HH1: Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation,* Londres, Société typographique, 1773. 2 volumes.

HOL: Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes,* éd. L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes.

KDH: 桑原武夫訳編『ディドロ，ダランベール編，百科全書 —序論および代表項目— 』岩波書店，1971年。

NDE: ディドロ著，野沢協訳「エルヴェシウス『人間論』への反駁（抜粋）」（小場瀬卓三，平岡昇監修『ディドロ著作集』法政大学出版局，1980年，第二巻）。

NEN: エルヴェシウス著，根岸国孝訳『人間論』明治図書，1966年。

ODT: 小場瀬卓三，平岡昇監修『ディドロ著作集』法政大学出版局，1976年—1980年，第一巻，第二巻。

1) ディドロも当初『人間論』をそのように受け取っていた。 cf. DRL, pp.549–550. NEN, p.337.

2) HH1, tome II, 99. 149–154. cf. HOL, tome VII, pp.153–157. NEN, pp.60–62.

3) DRL, pp.486–488.

4) たとえば，下記の箇所を『精神論』や『人間論』の叙述と比較されたい。 Thomas d'AQUIN, *Somme Théologique,* Traduction Française par J. Wébert, etc., Paris, Desclée & Cie, 1963. Ia Questions 84–89, pp.112–113. Ia Questions 90–102, pp.199–200. トマス・アクィナス著，高田三郎ほか訳『神学大全』創文社，1962年－． tome VI, pp.319–320. tome VII, pp.131–132.

5) ただし，こうした論議がクインティリアヌス著『弁論家の教育』で主要な問題にされているわけではない。cf. クィンティリアヌス著，小林博英訳『弁論家の教育』明治図書，1981年．I，p．27.

6) Jean François SAINT-LAMBERT, Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius. dans HOL, tome I, pp.7–8.

7) Julien Offroy de LA METTRIE, L'Homme machine. dans LA METTRIE, *Oeuvres philosophiques*, Londres, Jean Nourse, 1751, pp.14–22. cf. ラ・メトリー著，杉捷夫訳『人間機械論』岩波書店，1957年，pp. 48—57

8) Denis DIDEROT, Locke. dans DDE, tome IX, pp.626–627. cf. DOD, tome VII, pp.713–714.

9) ラ・メトリーの思想とディドロの関係についてはつぎの論文が詳しい。
Aram VARTANIAN, La Mettrie and Diderot Revisited—An Intertextual Encounter. in *Diderot Studies XXI,* Genève, Librairie Droz, 1983.

10) HE1, p.241. cf. HOL, tome III, p.145.

11) cf. Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat Marqis de CONDORCET, Essquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain. dans CONDORCET, *Oeuvres,* éd. A. Condorcet O'Connor et M. F. Arago, Paris, Firmin Didot Frères, tome VI, pp.272–276. コンドルセ著，渡辺誠訳『人間精神進歩史』岩波書店，1951年，第一部，pp．283 — 287、

12) HH1, tome I, pp.179–183. cf. HOL, tome IIV, pp.181–186. NEN, pp.70–72.

13) HH1, tome I, pp.198–200. cf. HOL, tome IIV, pp.202–204. NEN, pp.78–79.

14) DRL, pp.490–492. cf. NDE, pp.305–307.

15) ディドロのエルヴェシウス批判に関して従来の研究がこの転倒を問題にしないのは奇妙である。たとえば，D.W. SMITH, *Helvétius—A Syudy in Persecution*, Oxford, Clarendon Press, 1965. pp.186–192.

16) DEM, pp.232–240. cf. ODT, tome II, pp.372–376.

17) DEM, pp.83–85.

18) DEM, pp.302–303.

19) Pierre ASTRUC, Les Sciences médicales et leurs représentants dans l'Encyclopédie. dans *Revue d'Histoire des Sciences et de leurs Applications*, tome IV, Nos. 3–4, juillet-décembre 1951, pp.359–360.

20) Jean MAYER, Introduction. dans DEM, pp. xxx–xxxi.

21) Ibid., pp. xxxiii–xxxvii.

22) Denis DIDEROT, Cadavre. dans DDE, tome II, p.511. cf. DOD, tome VI, pp.245–246.

24) William COLEMAN, Health and Hydiene in the *Encyclopédie*—A Medical Doctrine for the Bourgeoisie. dans *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences,* Volume XXIX, Number 4, October 1974. pp.413–414.

25) Madame de VANDEUL, Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de M. Diderot. dans DOD, tome I, p.35.